

特集：卒業生便り

非研究分野での博士の生かし方

杉田 真希 (2006年3月生物学類卒業、2011年3月生命環境科学研究科博士後期課程修了)

こんにちは。生物学類卒業生の杉田真希と申します。博士号を取得した後、非研究分野の民間企業に就職しました。就職してから1年と2か月、やりがいあふれる仕事をしながら楽しく暮らしていたところ、そんなキャリアパスもあるということを紹介してみないかと林純一先生にお誘い頂き、このたび登場した次第です。所属の会社のことなども書きますが、あくまで個人の立場で寄稿したものですので、多少おかしな表現があったとしても、袈裟まで憎まずにいて頂ければと思います。

●はじめに

私は現在、株式会社Z会に勤務し、小学生の理科教材の編集をしています。Z会というと大学受験のイメージが強いかもしれませんが、実は幼児から社会人まで幅広い顧客を対象とした商品を扱っています。中でも今一番売上を伸ばしているのは幼児用や小学生用の通信教材です。博士号を持っていて何で小学担当？専門知識の無駄遣いじゃない？と思われるかもしれませんが、実際、小学担当に配属された当時は、私がそう思って落ち込んでいるのではないかと上司に心配されたものです。ですが、それはまったくの杞憂です。私は、もともと低年齢層を相手にした科学教育に携わりたいと考えていましたし、博士の力は、大学受験生用の教材よりもむしろ、小学生用の教材を作るときに生きてくると考えていたからです。本稿では、博士後期課程（以下、博士課程）で得たものが、非研究分野の民間企業でどのように生かせるのかということについて、私の実体験から感じたことを紹介します。

●博士の強み

博士課程に在籍している学生という、実験ばかりしているようなイメージがあるかもしれませんが、そうでもありません。分野や所属する研究室にもよりますが、博士課程の学生（博士課程まで進学すると宣言した学生）は、オープンキャンパスや地域のイベントなどで研究内容を社会にアピールしたり、そういう活動の実績や研究の利点、研究業績を書類に書き連ねることで研究資金を獲得したり、といった、将来研究を進めていくため、研究室を運営するための訓練(?)に時間を取られます。もちろん、そういうことは業績がないとできません。実験を繰り返す、確信を得て学会で発表したり論文にまとめたりするのももまた莫大な時間がかかります。共同研究者がいる場合はやりとりがさらに複雑になることもあります。案外デスクワークと人付き合いが多い仕事です。

研究をアピールするためには、分野内外での自分の立ち位置を把握していなければいけないので、学界や産業界(少なくとも業界内)をある程度俯瞰しておく必要があります。また、研究者の未来について考えると、どうしても、大学という組織のあり方や、海外の研究環境、日本の科学技術予算、事業仕分けの結果なんか

が気になってきます。変なほうに話や資金が転がってしまうと、もろに影響を受けることになるからです。

就活をし、会社で働いてみて、このような経験や視点を持つ学生はあまりいないということを知りました。博士ならできて当たり前と思うことでも、それが世の中の的に当たり前とは限らないので、うまく使えば仕事をするときに強みになります。

●博士、科学啓蒙に目覚める。

ここで、私が博士になりたかった理由を振り返ってみます。私は、高校生の頃から博士課程まで進学したいと考えていましたが、それは学べるものはすべて学んでおきたいということで、研究者になりたいと思っていたわけではありません。昔から、自分で新しいことを発見するよりも、誰かが発見したことをみんなに言いふらすほうが好きでした。言いふらすというのはなかなか責任のいる作業で、噂を流すにしてもデマか真実かを見極めてから広めなければ、嘘つき扱いされてしまいます。私は、他人の発見の真偽を確かめる能力とその能力の保証を博士号に求めました。1つの専門をもった上で、科学を“正しく・魅力的に”言いふらしたかったのです。

その思いがはっきりと形になったのは修士課程に進学した頃でした。日本でサイエンスコミュニケーション(※1)というのが流行り出し、当時の私は、まさにこれだ!と思いました。白岩善博先生や和田洋先生がオーガナイザーをされている関連講義を端から受講し、国立科学博物館のサイエンスコミュニケーター養成実践講座を受講して認定サイエンスコミュニケーターになり、サイエンスカフェや科学イベントのファシリテーター(司会のようなもの)などの活動と人脈づくりを進めました。そして、その世界で食べていくことを心に決めました。

●博士、就活をする。

博士2年の秋になると、「科学を広める仕事」という軸で就職先を探し始めました。実際にエントリーしたのは10社程度で、研究所の広報(一般の方に最先端研究の内容を分かりやすく紹介する)、新聞社(科学欄を書く)、科学技術政策のシンクタンク(日本の科学教育の方針を決めるためのデータを集めて分析する)、科学誌を扱う出版社、理科教育に関連する企業などの入社試験を、学部生や修士の学生に混ざって受けました。学振(※2)の申請書などを書き慣れていたので、エントリーシートで落とされるとはまずありませんでした。

博士が面接で一番しつこく聞かれるのは、研究に未練がないかどうかということです。この質問に美しく答えるのは、なかなか難しいことです。あまりに強く「未練はありません!」と言っても「研究うまくいってないのかな?≒仕事できないのかな?」と思われるし、いくら学生時代に一番頑張ったからといって研究

の話ばかり熱くしていると、「こいつを採用してもやっぱり研究を続けたいという理由で辞退されそうだ」と思われます。優秀ならそれでも内定が出るのでしょうか、その可能性を信じてわざわざ危ない橋を渡ることもありません。本心はどこにあれ、うまく空気を読んでバランスよく大人の回答することが大切です。こういうバランス感覚というのは、社会に出てからも要求され続けます。

そうこうしているうちに、Z会（本社の所在地は静岡県）から内定をもらいました。関東から離れることに抵抗があったので（こういう考えもポストクには向いていません）、ほかの内定先（川崎にある研究費を配分する組織）とずいぶん迷いましたが、通信教育という、現場との距離（教職よりは遠いが行政よりは近い）と影響力（数万人に伝えられる）のほどよい兼ね合いと、何より低年齢層への科学教育に関われるというところに魅力を感じたため、思い切って東海地方に飛び立ちました。

●博士、27歳にして新入社員となる。

会社の新人研修で、「学生と社会人の違いは何か？」という課題が出されたことがあります。もちろんそこは模範的に「責任が増える」とか「お給料をもらえる」とか「与えられる側から与える側になる」とかそんなことを答えておくわけですが、実のところ博士課程の学生と社会人なんて、人件費としてカウントされるかどうかということ以外はほとんど同じだと思っていましたし、今でもそう思っています。

博士課程の学生は、大学の名前を背負って研究発表をするので、そこに嘘があっては多くの人に迷惑がかかります。学振の特別研究員やRAなどとして給料をもらっている学生も沢山います。学生という身分なので教育を受けますが、その内容は新知見を世に与えるためのものです。与える方法を与えられているというのは、与えられる側なのでしょうか。与える側なのでしょうか。博士課程の学生はもう半分社会人のようなものですし、また、そうでなければいけないと思います。

●博士、教材編集部理科課の小学担当に配属される。

1か月間ほどの新人研修が終わると、配属希望を出す時期になりました（その頃には配属先は決まっていたと思いますが、形式上そういうことをしました）。私は、最終的に幼児か小学の教材編集をやりたいと考えていたので、それまでに視野を広げておこうと、営業や広告宣伝、情報誌作成担当などを希望しました。ところが、最終目標であった小学担当にいきなり配属されるという、うれしい誤算が生じました。

編集というと執筆者の先生がほかについて、その校閲や校正をする仕事、しかも問題は何年も使い回し、などと考えていたのですが、新規コースの開発をがんがん進めている右肩上がりの小学担当では、驚くほど刺激的な業務が待ち受けていました。教育係の先輩が1人ついてくれるのですが、その先輩（社歴も実年齢も1つ上の博士卒です）から指導を受けながら、いきなり小学4年生と5年生の教材を任されました。小学の教材は、問題もコラムも真っ白な状態から編集者自身が作ることが多いので、まずはネタ探しとその裏とりからです。特に、理科はネタが大切なので、自分の引き出しが多ければ多いほど、良いものが書けます。また、簡単な言葉や表現だけを使って、科学的に嘘のない説明を

するのは、かなりの専門知識が必要とされます。長い研究生活の中で引き出しの数を増やし、調べ物をとことんやるのが癖のようになっている博士には、まさにうってつけの仕事です。ページの半分だけのスペースに何か書くというときも、学会の要旨を書くトレーニングを積んでいたおかげで、字数制限内で言いたいことが言えます（本稿は提示された分量よりかなり書き過ぎていますが・・・）。書籍の新商品企画を考える機会も沢山ありますが、企画書の書き方やプレゼンも、やはり経験値が高い分有利です。

●おわりに

博士課程に進学すれば、何かが自動的に得られるというわけではありませんが、博士号を取ろう、業績を出そう、と必死に取り組んでいけば、色々な副賞がついてくるはずですよ。それは、物事を俯瞰する視点だったり、論理的な考え方やそれをアウトプットする力だったり、ストレス耐性だったりします。そうして得た「博士の力」は、社会でも十分通用するものです。それを博士や博士課程に進学する可能性のある人は自覚しておくべきです。民間企業にも知っていてほしいと思います。Z会（博士号取得者は社内に3名）も博士に関しては無関心なように見えます。名刺にPh.D（博士の意）の文字はありませんし、初任給も修士卒と同じ額です。博士なら当たり前身に付けていると思われる能力も、個人の素質として評価してくれるので、得といえは得です。でも、それは期待値が低いからです。後輩たちのためにも、博士に正当な期待をもってもらえるよう、頑張りたいと思っています。

やりようによっては、博士の力は就活でも社会人生活でも十分に生かせるということが、少しはお伝えできたでしょうか。このような記事でも、博士課程への進学を迷っている方の進路決定の一助となれば幸いです。最後まで読んで下さり、ありがとうございました。

※1 科学を一般に広く知ってもらうための活動。独立行政法人が頑張っている。大学でも取り組まれていて、筑波大学では特に盛ん。

※2 独立行政法人日本学術振興会の略称。博士課程の学生やポストドクを特別研究員として雇い、給与と研究費を支給している。博士課程の学生の多くが申請するが、通るのは上位1/3ほど。

Communicated by Osamu Numata, Received July 4, 2012.